慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国国民党の諸派と三民主義：孫文没後三民主義は如何に解釈されたか
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.11 (1939. 11) ,p.1407(1)- 1436(30)
JaLC DOI	10.14991/001.19391101-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391101-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小泉塾長著　四六判一八二頁　清雅紙裝　定價壹圓　送料拾五錢

新刊

學府と學風

「塾」といひ「三田」といふ言葉のもつ懷しさは、たとへ山を下りて幾十年經たうとも、われわれにとつて「永遠の故郷」のそれです。塾長最近の御所感、御講演の類を收めた本書は、一萬塾生の師父としての情味溢るゝ行文の裡に、塾傳統の毅然たる福澤精神を隨所に汲みとることが出來る、塾員諸賢必讀の書です。

大學に於て最も尊重すべきものは、外の何物でもなくて、その學風であらう。生徒各自の才能の芽を醞釀させてくれる雰圍氣であらう。いや、學問に對する純粹な喜びと情熱と勇氣とを育む樂しい春の大氣であらう。

小島政二郎氏「三田の思ひ出」東朝所載

近刊豫告

加田哲二著
如何にして學ぶべきか
——學問の仕方——

宮下正美著
兒童讀物の選び方
——附　良書百選——

東京二丁目一番地　三田　慶應出版社　電話三田二七九一番　振替東京一五八一〇八番

三田學會雜誌　第三十三卷　第十一號

中國國民黨の諸派と三民主義

——孫文沒後三民主義は如何に解釋されたか——

加田哲二

中國民族運動に關しては、筆者は、既に數次の機會において執筆してゐる。その大部分は、拙著「人種・民族・戰爭」第二篇　三、支那民族運動概觀　四、支那民族運動と抗日問題　拙著「東亞協同體論」第六章　東亞協同體と民族主義　拙著「現代の植民政策」第三篇・第四編中の諸論稿であり、最近の問題については、「支那知識階級に與ふる書」（日本評論三月號）「租界に觀る列强の政策」（中央公論七月號）「日支文化問題の新らしい着眼點」（文藝春秋　現地報告七月號）「支那新政權は何を要求するか」（日本評論十一月號）「新政權運動を繞る人々に與ふる書」（經濟情報政經篇十月號）などに書いてゐる。筆者は、この運動の日本、從つてまた東亞全體の運命に重要な關係を持つことを認識するが故に、その研究

を今後においても續けて行きたいと思ふ。次の文章は、この運動の一面であり、最も重要な三民主義の諸解釋とその黨派的關係に關する若干の研究である。從つて、孫文の三民主義それ自體に關して、なほ多くを闡說する必要を感ずるものであるが、それは、以上の論稿に多少とも觸れてゐるので、この場合は省略に付した。

一

支那國際關係史の權威モースがいつてゐるやうに、日清戰爭後の二三年ほど、支那が歐洲諸國によつて、無慘な侵略を蒙つたことがない。支那は、その西歐資本主義に對する反抗として阿片戰爭以來數次の戰鬪行爲に從つてゐる。そして、その敗戰によつて、何時も重い負擔を負はされてゐるのである。しかし、日清戰爭は、支那の政治的並に軍事的無能力を端的に示したものである。その意味において、寢れる獅子は、いまや死せる獅子と觀念せらるゝに至つた。しかしながら、支那における政治的覺醒は徐々ではあつたが、遂に來たのである。支那人の間にあつては、一般的に政治革新とか、封建の維持とかゞ問題となり、支那を搖り動かす外國帝國主義の砲聲と和して、內部的改革の問題が喧しくなつて來た。從來の自然發生的反射的排外運動が、一つの意識的運動の形態をとるに至つたのである。近代的觀念における國家問題が、こゝに起つて來た。

清朝の救濟をめぐつて、慈禧大后を中心とする舊派政治家と、政治革新を斷行すべしとして「變法自疆」を主張する康有爲・梁啓超の新派政治家が、互に相ひ爭ひながらも、尙ほ「封建宗主」の再興に腐心し續けてゐる間に、南方にあつては、孫逸仙を首班とする一群の會黨が「討滿興漢」のスローガンの下に、封建的政治の一切を粉碎して、新支那建設のために、全支那民衆の大同團結を敢行しようとする氣運が勃々として生み出されつゝあつた。

孫文一派の運動は、次の事情の下に生み出されたものである。

第一は、漢民族の間に傳統的に懷かれてきた滿洲人の「清朝」に對する反感である。支那人口を形成する大凡四億餘の人民は、甚だ複雜な種族から成り立つてゐる。しかも、孫文一派によれば、その種族の中、中心をなすものは、漢民族である。しかるに、明朝沒落後、政權は漢民族の手を離れて、四億餘の人口中、最も多數を占むる漢民族が、少數の民族のために統治され、壓政に苦しまされてゐるのが現狀である。而して、その清朝は正に崩壞せんとして、常に因循姑息の手段を弄し、全支那の滅亡へと拍車をかけてゐる。

こゝに、漢民族として先天的に持つ偏見から離れても、いまや、支那全土の救濟・再建のために、清朝を倒し「倒滿興漢」の實をあげなければならぬといふ認識が起つて來た。

第二に、かゝる情勢は一刻もゆるがせにすることの出來ない緊迫した事態だ。何となれば、歐米列强の政治的・經濟的侵略は、瀕死の清朝の弱身につけ込んで、益々露骨となりつゝある。南支における英佛の活躍、長江一帶における英國の進攻、山東方面よりする獨逸の擡頭、北滿からの露西亞の南下等は、やがて支那民族をして、自國に住み得ぬ狀態に追ひ込むことゝなるであらう。かゝる政治上、經濟上の歐米列强の侵略を拂ひ除けるためには、漢民族を中心として、全支那民衆の團結を直ちに實行する必要があつた。

第三は、彼等にはかゝる運動が、決して不可能なことではないと考へられた。從來、白人種に比べて黃色人種が

甚だ文化的には進歩し難き宿命的な素質をもつてゐるのであるとは、夙に支那人間にいはれて來たところであつた。だからこそ、今まで白色人種の侵略に對しては、その是非を問はず、黄色人種たるが故に、「沒法子」と叫ばざるを得なかつたのである。しかしながら、日清戰役によつて清朝に一擊を加へた同じ黄色人種の日本が、白色人種のロシアと對峙して、これを擊破したことは一體何を示すのか。支那が今日まで持つて來た退嬰的な氣風は一掃し得る筈である。そして、敢然、あらゆる障害を打ち破つて民族の結成を斷行しなければ成らない。こゝに孫逸仙は「討滿興漢」「歐米帝國主義排擊」の旗印の下に、支那民衆を大同團結しやうとするのである。

二

孫逸仙が企圖した支那民衆の大同團結の母體となつた中國々民黨の起源は、明治三十八年東京に結成せられた中國同盟會に存する。その後、同會は國民黨となり、中華革命黨となつたが、その運動は常に失敗をくり返しつゞけてゐた。

その原因の第一は、孫文一派には清朝およびその繼承者たる舊派軍閥を壓倒するだけの財力が無かつたからである。この間の事情は辛亥革命が、明らかに示してゐる。

第二の原因は、彼等の運動が、その初期においては、諸種の會黨を包容することにのみ汲々として、現實の支那社會情勢に則したるイデオロギーの下に、これらのすべてを整理することが無かつたので、事件に際會する毎に、甚だ末梢的な論爭の結果、四分五裂するのが常だつたことにある。

若しも、大同團結が結成されねば成らぬとするなれば、かゝる弱點は必ず補强せられなければならぬ筈である。しかも、第一の缺陷は發生しつゝあつた支那土着資本との抱合によつて、おぎなはれることゝなつた。支那の封建制を經濟的に解體せしめつゝあつたものは、清朝治下に蓄積せられたる官僚的資本と、外國資本の進出に伴つて發展し來つた買辨資本である。而して、支那における封建的勢力の異常な根强さと、列强の錯交した侵略行動とは、支那をして圓滑に封建的扮裝から脱することを阻み、國内における土着資本の發生を甚だしく遲延せしめられた。

かくのごとき狀況の下にあつて、孫逸仙の計畫と運動とは、支那土着資本以外の財力と、長期に渉つて結合することが困難であつた。何故なれば、彼等は、封建軍閥を攻擊し、歐米列强の經濟的壓迫を排擊するからである。

しかるに、辛亥革命以來、舊支那社會に發展してきた官僚資本と、外國資本を擁護者とする買辨資本の中のある部分が、漸次遊離し來つて、以前から甚だ稀少ではあつたが存在してゐた支那土着資本の中に流れ込んでゐる。これらは南方における華僑の活躍とともに、漸次土着資本を增大せしめた。これらのものに、中國々民黨は、その援助者として財源を求め、經濟的地盤を築き上げやうとした。

支那土着資本の外國資本に對する依存性は强いものがある。しかしながら、土着資本は、その本質上、外國資本とある點において對立する。かくのごとく對内的にも、對外的にも、「封建軍閥打倒」を叫ぶ一方「打倒帝國主義」「打倒外國資本」の看板を掲ぐる國民黨が、土着資本の陣營に喰ひ込むに充分であつた。

かくて財力の背景を獲得した國民黨は、第二の困難に遭遇せねばならなかつた。即ち、利害の著しく相違する諸

會黨を如何にして統轄し全支那民衆を導いて、有利な闘爭を續くるかといふ問題である。封建の甘夢を突然歐米資本主義諸國の侵略によつて醒まされた支那では、極端な新舊の對立がひき起されてゐた。これは、實に近代支那の一特徴である。だから社會構成上でも、根強い封建的色彩の中に、資本家階級と、これに對立する近代的な勞働者階級が同時に織り込まれてゐる。從つて、諸會黨の内には、封建社會から直接發生した凡そ百餘年を遡る明朝沒落によつてかもし出された感情や民種的偏見から結ばれる會黨もあれば、外國資本を驅逐し、封建的桎梏を除去しようとする土着資本家中心の會黨もあり、更に、資本主義制度並に封建主義制度全般に反對するプロレタリアートの會黨も、萠芽としてゞはあつたが、存在してゐたことは、當然推測せられる。これらを如何にして抱容し結合するか。それが第二の困難であつた。

中國々民黨は、清朝とこれが後繼者たる舊軍閥の打倒、歐米資本主義の侵略排擊といふ點に、これらの會黨の共同の要求を見出した。そして、この旗印の下に、支那統一の鍵があると誤信したのであつた。しかし、それは、紛糾を一時延期させて作り上げた僞裝的大同團結である。それは、雜然たる諸會黨の權力の均衡が、孫文といふ卓越した個性によつて、一時辛うじて保たれたる狀態である。

かくて孫逸仙は、その「三民主義」の内に、これらの會黨を全部包容するに足る内容をもり込む必要を生じたのである。

三

民族を興亡せしめた原因に二つのものがある。一は自然力であり、他は人爲力である。しかるに、現在支那は四千餘年を經過したのにも拘らず、殆んど衰微も見ずに今日に至つたことを考察するとき、今後自然力によつて支那が滅亡せしめられるとは、考へられない。故に現在支那が、正に滅亡せしめられんとしてゐることが、事實であるとするならば、その原因は、必ず强力な人爲力による。しからば人爲力とは、何か。歐米諸國の支那に對する政治上、經濟上の壓迫侵略と自國における人口增加の壓迫である。これによつて、支那は、國内的には、半封建的經濟的體制を維持せしめ、對外的には、政治經濟的隷屬を意味する半植民化しつゝある。

しかも、かゝる事態から支那を救ふ唯一の道は、民族的團結の强化である。しかるに、支那民衆は家族及び宗族に對する團結力は甚だ强靱であつたが、國家に對しては薄弱である。こゝに三民主義の主張者孫文は、支那の國際上、政治上、經濟上の平等を促進せしめて、永久に世界に適存せしめるために、强く民族の團結を力說する。

「我等の民族は、現在世界上で如何なる地位に在るか。世界の各民族と比較すれば、我民族の人口は最も多く最も大にして、四千餘年の文明を有する點に於ては、歐米と正に並行してゐるのである。然るに中國人は只家族と宗族との團體のみで、民族的精神を缺いてゐるから、四億の人が結合して一の中國を形成するとは謂へ、實に「散かれたる一片の砂」に過ぎず、今日では世界上の最貧弱國家となり、國際上最低の下位に在るのみならず、人は刀俎となり、我は魚肉となつてゐるといふ有樣で、現代に於ける我等の地位ほど危險なものはない。それ故若しもこの際、民族主義を提唱することに專心し、四億萬の人を結合して堅固なる一の民族たらしめなければ、中國は便ち亡

國滅種の憂を有するのである。我等はこの危急存亡を挽救せんが爲めに民族主義を唱道し、民族精神を發揮して國を救はんとするものである。」（孫中山著　三民主義　改造文庫版　二〇―二一頁）

四

孫逸仙の卓越した人格と手腕は、雜然として利害交錯してゐた幾多の會黨の內に共同の目的を作つて、統一ある團體とし、經濟的基礎と人的基礎を得ることが出來た。こゝに彼等は、支那再建の計畫に向つて、あらゆる軍閥と先づ戰ふ事が出來るやうになつた。

而して、一度北伐の師を興すや、近代的な武器と戰術を持つ國民革命軍は、孫傳芳・張宗昌・吳俊陞・吳佩孚・張作霖等の軍閥を、次ぎ〳〵に屠ふつて、遂に、中南支一帶を中心として、支那統一を示す靑天白日の旗を飜すに至つた。

しかしながら、中國々民黨のかやうな統一には、二つの弱點があつた。

その第一は、北伐途上において、戰略上次第に包容して來た準國民黨分子との關係である。例へば、北伐初期における湖南省師長唐生智、長江作戰後山西・西北諸軍との妥協による馮玉祥・閻錫山・韓復榘・商震等、または東北軍閥との妥協に際して張學良・萬福麟・于學忠・湯玉麟等に對する關係である。彼等を包容することによつて、國民黨の勢力は、一擧に增大した。これらの軍閥人並にその關係者は、封建的軍閥的イデオロギーの所有者である。從つて、三民主義とは甚だ遊離してゐる黨員を徒らに增加せしめた。この結果、三民主義の權威は著しく失墜した。

第二は、從來、孫中山を中心とし、その個人的に卓越した手腕によつて「三民主義」の內に大乘的に統轄されてゐた種々な黨派が、民國十四年三月十二日北京における孫文の客死とともに、漸次三民主義に對する解釋に意見の相異を來し、內訌を生ずるに至つたことである。

三民主義提唱者の主觀においては、「民族の自決」「立憲民主政治の確立」「資本主義體制の完成」といふ歐洲大戰後の風潮に乘じた主張であつた。しかし、半封建性と半植民地性を本質とする支那社會の特殊性は、その內容を、著しく莫然たるものとした。その主流は、半植民地性に對して、「歐米資本の排擊」半封建性に對して、「軍閥打倒」を主張した。いひ換へれば封建的壓制の打破と歐米列强の帝國主義的侵略に對して、辛うじて共通の利害を感じてゐた。しかし、國民黨の分子の中には、土着資本を基礎とする一派、「倒滿興漢」と云ふ感情に結ばれた一派、資本制全般に反對する一派があり、それ〴〵本質的な相違のあることは宿命なのであるから、從つて、これ等全てのイデオロギーである三民主義も、現實に直面して、その力說する重點は、完全に異らざるを得なかつた。孫文の死は、この相違を白日の下にさらけ出した。こゝに、幾多の妥協し難い理論鬪爭と、これに伴ふ武力鬪爭をひき起した。

ある論者は、當時の國民黨を分類して

（一）三民主義を確守し、絕對に社會革命を否認し、共產黨との協調を欲しないもの。

（二）三民主義を信ずるも、これを社會革命の一段階として認むるもの。

（三）共產主義を信ずるも主義實行のため、先づ孫文主義の國民革命を實現するを有利と認め、三民主義者と協

同せんとするもの

（四）直ちに共産主義の實現を期し、國民黨を單に手段として利用せんとするもの

としてゐる。長野朗（支那の社會運動二二六）

第一の部類には、蔣介石を中心とした軍政者、白崇禧・何應欽・陳銘樞等、右派西山派といはるゝ謝持・馮自由・居正等、及び胡漢民一派が數へられるであらう。

第四には、張國壽・蔡和林・季戴鄭等の共産系であることはいふまでもない。

第二と第三は、國民黨左派といはるゝ汪兆銘一派と機會主義、第三黨として共産派から排擊さるゝ陳獨秀一派とで、彼等は互に接しまた離れて、その分岐點を明らかにしない。

孫文逝去の當時における國民黨内部の分野は、次のごとくであつた。

右派

A　理論派　胡漢民　劉蘆隱

B　元老派　蔡元培　吳稚暉　李石曾　張靜江　于右仁　李烈欽

C　西山派　張繼　林森　謝持　居正　鄒魯　邵元冲　許崇智

D　廣西派（舊）李濟琛　李宗仁　白崇禧　黄紹雄　徐景榮　鄧世增　葉琪

（新）俞作柏　李明瑞　楊騰輝　伍廷　呂煥炎

中間派

A　浙江派―蔣介石派

文人派　宋子文　陳果夫　陳立夫　邵力子　古芬　王伯群　孔祥熙　葉楚傖　劉紀文　劉文島（王正廷）

武人派　何應欽　何成濬　楊杰　吳恩豫　谷正倫　張群　陳儀　張希燾　陳銘樞　劉峙　顧祝同

（朱培德　韓復榘）

財閥派　虞洽卿　李復　唐壽民（張靜江）

騎牆派　譚延闓　戴季陶　孫干科　恩克巴　丁超伍　白雲梯

左派

A　改組派　汪精衛　陳公博　濟存統　顧孟餘　王法勤　何香凝　陳樹人　藩雲超　宋慶齡　陳璧君　王樂平

B　第三黨　譚平山　鄧演達　陳獨秀　徐謙　甘乃光　陳友仁

C　共産黨　林祖涵　吳玉祥　周恩來　郭沫若　李立三　毛澤東　朱德　葉挺　賀龍　許繼慎　彭湃

彭德懷　代英

特殊派

A　山西派　閻錫山　趙戴文　商震　徐永昌　朱綬光　趙不廉　周玳　劉撲忱　傅作儀

B　奉天派　張學良　張作相　張景惠　翟文選　湯玉麟　萬福麟　王樹常　王樹翰

C　西北派　馮玉祥（張之江）　鹿鍾麟　薛篤弼　熊斌　丁春膏　馬福祥　劉郁芬　何其鞏　唐悅良
（孫良誠）

D　舊武漢軍人派　唐生智　魏益三　李品仙　張發奎　黃琪翔（何健）

五

政治的自由、經濟的解放を目指す國民革命が、長江一帶を中心として、ほゞ完成されようとしたときから、國民黨內部の分解作用は開始せられた。

それは、第一に孫文といふ全黨員の信望を一つに集めてゐた中心人物が客死したことにもよる。また、軍閥打倒といふことを中心にしてゐる時代――云ひ換へれば、「反革命勢力を一掃し、革命の主義を大衆に宣傳して同情と信仰を得る」ために、孫文が革命の第一階段とした軍政時代には、軍政家の間にしば〳〵相克が行はれるし、またその結果出現する軍政獨裁者は、理論的立場を守る一派と對立せざるを得ない。前者は、蔣介石と唐生智および廣西派との關係、後者は蔣介石と胡漢民および汪精衞との關係等である。かくて、漸次、國民黨內は複雜化してゆく。

しかし、これらの原因は、國民黨の內訌に口火を付け、その關係を複雜化してゐたが、眞に彼等の內訌をひき起さしめたものは、三民主義そのものゝ內に內在する矛盾であつた。淸朝とこれが後繼者たる舊軍閥の打倒、歐米資本主義の侵略排擊といふ旗印の下に、支那統一の大同團結をもくろんだ孫逸仙は、その成功とゝもに、その中から生ずる紛叫を一時延期させるに止まり、いまに至つて、その紛叫は再び爆發したのである。

國民黨員は、三民主義の內に莫然と綜合的に包含されてゐた民族、民權、民主の理論が、果して『現實』に何を意味しなければならないか。封建制に對する破壞が一應完了し、その目的とした舊軍閥が一掃せられたるとき、その廢跡にやがて建設せらるべき中華民國の自由と獨立の殿堂を思ひ浮べながら、心に深くこの問題を回想せざるを得なかつた。

支那社會の基礎をなすものは、なにか。封建社會から僅かに近代社會の萠芽が出初めた許りの支那においては、その經濟構成の基礎を作るものは、歐米諸國におけるやうに資本主義的大生產樣式ではない。そこに存在し、根據を持つものは、農民であり、手工業者であり、小商人である。かつて、孫文もその三民主義の講演の中で、「支那の社會的平原說」を唱へたことがあつた。本來の意味における富豪は、支那には存在しない。もし、ありとすれば、それは大貧に對する小貧に過ぎない。支那民族の生存の基礎をなすものは、これらの農民、獨立手工業者、小商人でなければならない筈である。

國民革命の第一の目標である軍閥が一掃され、第二の目標である歐米資本主義の侵略に眼が向けられたとき、「資產家階級」は、果然問題の中心となるに至つた。果して、支那におけるこれらの「小貧」は、國民革命にとつて敵なのか、味方なのかの問題が、これだ。

資本主義制一般に反對し、私有財產を否定し、無產者獨裁を意圖する中國共產黨は、地主、商工業者を一束とした資本階級をも排擊する。しかしながら、現在の支那にとつて、眞に社會生產を擔當するものは、これらの中小資

產家をもふくめたる農工商一般なのではあるまいか。

「現在の中華民國の社會は、未だ一個の農業と手工業とより成る社會に過ぎぬ。このことは、何人と雖も否定する事は出來ぬ所である。社會經濟的情勢にして、既にかくのごとくであるなれば、かの我等中華民國人が現在營む物質生活の基礎もまた、自然、あのさゝやかなる獨立農業者及び手工業者の身上にあることは、疑を入れぬ所である。」（陳銘樞　我等は何が故に中國共產黨を打倒する要ありや　七頁）

こゝにいふ農業、及び手工業とは、甚だ廣き意味に用ひられ、工商混合業者をもふくむものである。

「吾人の稱する獨立農業者とは、單に自作農のみを指してしかく云ふのではない。凡そ、勞働力を有して、略々牛馬・糧食・種子等を有して、以つて田畑を耕作し得る底の農夫は、又當然この中に屬するものである。更にまた所謂獨立手工業者とは、唯に手工業主及び手藝店主のみを指してかくいふのではなく、凡そ、外部に向つては店舗を開き、內部には別に製造所を有するがごとき商工混合業者も、また一括この中に屬するものである。」（同頁）

而して、彼等は、支那全社會の衣食住の殆んど全部を作り出してゐるのであるから、彼等を失へば、支那民衆は死刑を宣告せられたにも均しい。

「この兩種の社會分子は、農業の部面にあつては、全社會の食糧を生產すべき責任を負ひ、工業の部面にあつては、また全社會の工業品の最大部分を生產すべき任務を負ふてゐる。この我等の社會が、物質生活上において、よく存續し續けられる所以は、即ち彼等が存在するその緣故によるものだつたのである。されば、假に、一朝彼等がなくなつたとしたなれば、我等の全社會生活は、即ち死刑を宣告せられたるに均しいのである。」（同頁）

支那民衆の生存の基礎を脅やかすことは、民族を破滅に導くことである。しかも、それは封建軍閥と歐米資本主義の侵略の內に押し流されやうとしてゐる支那民衆である。支那民衆は、その生存のためには社會上の軋轢には一切眼をとぢて一時、近代的經濟體制の確立に邁進せねばならぬ。こゝにおいて、三民主義における民主主義の生產擴充の部面が强調せられる。

從つて、資本制一般に反對する中國共產黨は第一に國民革命の破壞者として、第二には國民生活の破壞者として排擊せらるゝことは當然であらう。

「…第三インターナショナルの走狗——中國共產黨は、專ら階級間の惡感情を煽動し、階級鬪爭を鼓吹し、社會上種々の業務にたづさはる人民を挑撥して、互に衝突せしめ、互に水火の間柄となし、全國民衆の國民革命に對して貢獻し得べき力を、一齊に消滅せしむるのである。諸君試みに考へても見たまへ。この種のおそるべき破壞手段がいかなる敵の砲火に比べても、尙ほひどいものであるか無いかを！」（三頁）

三民主義者の目的とするところは、軍閥と帝國主義を打倒することにある。まづ軍閥の打倒を要求するのは、これによつて、國家的統一を完成し、その過程において、帝國主義の打倒に向ひ、これによつて、國權の恢復を企圖せんとするものである。從つて、國民革命の第一步は、打倒軍閥にある。しかるに、共產黨は、國內において、重大な陰謀を企圖し、これによつて、外交交涉上の重大な障害を惹起して、われ〳〵の打倒軍閥の運動を阻止するも

のである。

中國國民の現在における物質的生活の根據は、獨立農業者・手工業者に存する。これらを攻擊の標的とする共產黨は、積極的には無產者階級をして、他を支配せしめ、消極的には、その反對者を抑壓することによつて、非常な暴政を惹起する。これ共產黨を排擊せざるを得ない所以であり、それはまた中國國民のすべてを、その餓死の狀態から救ふ所以でもある。

かくて、三民主義を遵奉し、國民革命を推行するために叫ぶ。

「這個罪在不赦的中國共產黨」

「照中國的環境及生產情形而論，只有孫總理的三民主義，是唯一救國的主義。只有實行三民主義的國民黨，是唯一救國的黨。能行三民主義，中國民衆在將來戈能够得到眞正的幸福，戈是各階級自由平等人類大同的擔途。至於馬克思主張的階級鬪爭，列寧主張的無產者專政，都不是使現時代的人類得到幸福的良好方法，絕對不能拿這種方法去解決人類的經濟問題；是少限度，也絕對不能用這種方法來解決現在中國的經濟問題。」（何應欽　對第一軍的訓話　上海大東書局　一九二八年刊　十二頁）

民主主義の基本をなす衣食住の問題は、かゝる一派を生ぜしむるに至つた。

彼等は、蔣介石を中心としたる政治家・軍人および育成されつゝある土着資本家の一部であつた。彼等は中央派とも呼ばれ、またの名を、その關係の最も深い地名をとつて「浙江派」とも呼ばれた。

彼等が、支那建設のために第一に、なさねば成らぬことは、列强諸國におとらぬ經濟體制の確立であつた。そこで、近代的な經濟組織の建設に從つて發生する種々なる問題に對しては、一時これを默殺して、ひたむきにその目的に邁進する必要があつた。こゝに共產主義を排擊せねば成らなくなつたことはいふまでもないが、舊軍閥一掃とゝもに、當然軍政期から訓政期に移る可きであると、總理孫中山の純理をふりかざす一派をも斷壓せねば成らなくなつた。

こゝに、支那における獨裁主義の主張の根據がある。これに伴ひ、獨裁的な政治團體が作成せられた。それが藍衣社である。

彼等は、右に精銳なる軍力を持ち、左に獨裁的な政治結社を組織して、突進する。

しかも、その目的とするところは、支那內外のあらゆる問題を一時默殺して、孫文が唱へた支那の「社會平原」に一頭角をあらはす或るものを建設しやうとするのであつた。

六

孫中山は、支那に迫り來る三つの壓力を示した。それは、第一に列强の人口增加の壓迫であり、第二はその政治的壓迫、第三は經濟的壓迫である。これらの壓迫は、支那民衆の一部とか大部分とかいふのではなく、全部が感じてゐる壓迫である。

これらの現象は、反面支那民族內部に三つの弱點を作ること、なつた。即ち

「我們受外國帝國主義這三種之外，再加上民心渙散，沒有抵抗强暴的團結和能，是自己第一種積弱；帝攻遺毒，流爲軍閥，竊奪國家政權來塗炭生靈，而人民却不但沒有管理家事業的權力，並且沒有抵抗軍閥的能力，是自己第二種積弱；機器發明了幾百年，而我們還是生產落後，天然的富藏，自己不知享用，而任人佔取得去做吸收中國人血汗的資料，弄到一種全國皆窮的景況，是自己第三種積弱。（胡漢民　國民黨民衆運動的理論　上海大東書局　一九二八年刊　一三—一四頁）

かくの如く、外部からの壓迫、內部の脆弱性は、民族、民權、民生の三問題を、支那の運命を賭するものとして、解決を迫る。

しかも、これらは同時に、順序正しく解決することを要する。何となれば、支那はその全部を直ちに必要とし、しかもその一歩をあやまてば、支那は滅亡せねばならぬからである。

こゝに、三民主義は主張せられ、その第一歩として民族の團結が叫ばれる。かゝる民衆運動には三つの注意すべき點がある。

一、民衆運動は挽救國家危亡和保障社全生存的一個力是，是應該鼓勵的。

二、民衆運動便有如何始可使之成爲有益於社會的問題。

三、民衆運動，失敗和成功，都於社會有很太的影響，而我們的問題，便是要如何纔能使它成功多失敗，及如何使它好影響多於惡影響。（前揭書　三頁）

こゝに、指導者と組織と共同の信仰が絶對に必要となる。

「第一須有不拐騙民衆的忠實領導；第二須有强固的組織；第三，須有共同的信仰。這三個重要條件完備了，民衆運動纔有不可搖撼的基礎和不可抵抗的力量。」（前揭書　同頁）

かくて、民族的團結は求めらるゝか、しかしその中樞をなすものは共產主義および中國共產黨ではない。

何なれば、彼等は民族的團結に階級鬪爭を引き入れるからである。それは、完成した民族的團結を、利害の對立といふ見地から、細胞にまで寸斷してしまふ。

「牠的兩大對壘的階級鬪爭便要成爲同一階級分裂爲多少職業，同一職業分裂爲多少派別，同一派別分裂爲多少小組，同一小組分裂爲多少個人，分裂愈多，鬪爭愈多天下哪有把全個人類全個民族分拆到極點，鬪爭到極點，而可以說這是爲人類爲民族爲個人謀得幸福的革命方法呢」（前揭書　五頁）

しかしながら、それは個人を無視したる獨裁主義であつてはならない。何となれば、三民主義も窮極においては全人類の救濟といふ世界政策に移るにあるとは，孫文自らも認むる所であり、（金井譯　三民主義　五五頁）且つ、獨裁的國家主義は、往々帝國主義列强と何ら變る所なき行動をとるからである。

「國家主義，沒有世界革命的資格，自不必說。固然，在求國家之自由獨立一個目的上，它也是要抵抗强權，因此它就可以牽合到民族主義的底下，但它却不是民族主義全體，尤其不足整個的和連環的三民主義中的民族主義全體，而況事實上發展到德意志，意太利，和□□那種國家主義，就成了帝國主義的代表」。（胡漢民　三民主義之認識　一

九二八年　上海大東書局刊　六頁）

彼等は、無政府主義をも肯定しない。何となれば、その理想とするところは同じであつても、無政府主義には、これを實行すべき方策がないからである。

「無政府主義的最終目的爲無治，爲大同，與三民主義目的完全一揉；但其最大的弱點，在於沒有實現大同的方法。」（前揭書　同頁）

故にこれを總括すれば、

「國家主義，在求民族之自由獨立上爲不健全，其病在幼稚；在事實上發展成爲帝國主義，其病在偏爲民族主義之下的右派。無政府主義，在企望人人自由平等人人無權無爭的理想上爲民權主義的左派，而其病在於無實行的方法。共產主義，在階級革命和階級獨裁的理論與方法上，其病在幼稚；在不認識民族主義和民權主義於世界革命爲需要的全部意義上，其病在不徹底强暴行之，且有自趨於反革命一途的危險傾向。」（前揭書　十頁）

かくて、眞に支那を救ふものは唯、孫文「三民主義」の眞蹟にある。

彼等は、一九二七年の清黨に際して、蔣介石派に組して次の如く叫んだ。

「我們要認清楚的，就是我們每次的清黨，在行爲上雖是消極的，而在動機和結果說却是積極的，進步的。中華革命黨比國民黨進步，中國國民黨比中華革命黨更進步，這是事實，不是空語。所以我們現在應該希望，不但徒然希望而應切實去做到，清黨以後的中國國民黨一定比清黨以前的中國國民黨更要好，更要進步。而且論理也應該是那樣的。清黨以前還有共產黨破壞搗亂，清黨以後這些障礙都沒有了。做得到或做不到全靠我們了。我們要緊緊記着：清黨不只是要把共產份子，投機分子，土豪劣紳清除出去，並且是要把：

本黨的忠實同志團結起來！

本黨的基礎鞏固起來！

本黨的工作表現出來！

本黨的精神發揚出來！

本黨的使命完成！

本黨的主義實現出來！

（胡漢民　清黨之意義　上海大東書局一九二八年刊　八〇—八一頁）

しかも、一度蔣介石一派によつて國民政府の中樞が固められ、その獨裁的傾向が著しくなるや、三民主義の眞蹟に反するものとして、改組派もしくは、新軍閥と結んで、反蔣運動を起すものあり、これらとは別に理論的に中央幹部派を攻擊するものあり、常に「三民主義」への信仰を中心として行動を律してゐる。

彼等は理想としては、常に孫文の心から傳はるあるものに、より近ずかうと努力してゐる。それは、三民主義の理論といふよりも、多くこの派の人々にとつては、三民主義の信仰であつた。即ち孫文の考へてゐた「大同社會」へ、最も近ずかうとしてゐた。

しかし、現實に直面して漸次增加して行く支那勞働者階級と、建設されて行く資本主義體制の間にはさまれて、かゝる中間階級的なイデオロギーは餘りにも遊離し過ぎてゐた。勿論そこには、多分に聖賢的な曲事にめげぬ氣品がつきまとつてゐることは、見逃すことは出來ない。しかし、これ等は一括してその現實的政策の批判にのみ努め自ら何ものも築き上げやうとはしなかつた。それでは如何にして三民主義を實行するのか。彼等には答へる術がない。そして徒らに、「力」に反抗し、またはひきずられてしまふのである。彼等はロマンティカーである。さればこそ、聖賢派とも呼ばれたのである。

七

理論派は思想的に、西山派は信仰的に、そして廣西派は實行的に、孫中山の「三民主義」の眞蹄を、自分のみが會得してゐると確信して、浙江派へも、また共產派にも近づくことなく、その中間を去來して、國民黨右派たるの地位を占めてゐる。これに對して、これと同樣、國民黨內を遊泳しながら、しかも彼等と對照的な左翼たる地位を占めるものは改組派である。

改組派は、「社會平原」の事實までも確認したわけではないが、少くとも半植民地支那における「階級」の特殊性をみとめ、かゝる事情の下にあつては、容易に「階級間の調和」が實現し得ると、固く信じてゐた。

「在今日中國國民革命的過程中，我們的同盟者是工人，農人，和小資產階級。這是從國際帝國主義壓迫下的殖民地和半殖民地起來要求獨立的一個理論，也是今日國民革命表現於俄們目前的一件事實，同時也定促成國民革命成功的一條聯合戰線。」（陳公博　中國國民黨所代表的是什麼？　上海復旦書房刊　三版一頁）

しかも、かゝる聯合戰線の精神をなすものは三民主義であり、肉體をなすものは國民黨である。而して、この肉體と精神との完全なる一致、即ち三民主義を遵奉する一國一黨こそが、實に困難なる國民革命を完成し得るものである。

故に、國民黨を構成し、國民革命を擔當していくものは、農工階級を主幹とすることは勿論であるが、決してこれのみでは無い。何となれば、社會主義制度を確立しやうとする一方、近代的なる經濟體制を樹立してゐなければ成らぬのが、支那の實狀である。

こゝに、國民革命は、資本主義制度を建設しながら、同時にこれを修正し、その完成せられたときは、修正を完うした、近代的社會制度を實現せねば成らぬ。

「我們分拆各國國民革命史與中國國民革命史，有很明顯的兩個例外：方面更在事實上不能限制其發展，那麼對於革命的將來，誠有趨向於資產階級革命的危險，所以我們應該不要亡記節制資本的原則。即是說我們還要對小資產階級讓步，使其穩固固有的社會經濟構造而抵抗帝國主義，一面更須建設國家資本，使小資產階級僅成爲建設的一要素，不要使其變成大資產階級而搖動革命的基本。」

「小資產階級的功用，在於經濟原則的交換和社會構造的補助，其作用實在於職業，而非在於階級。不過因歷史的遺儔，儼然成爲階級，反埋沒其作用的固有性。我們雖然明白在很遠的將來，這個階級很難消滅，然而我們應當在建

設民生主義國家的當中，一方面儘量發揮其職業的作用，一方面使每個小資產階級成爲社會生產補助的一員而減削其階級性，以免變爲掠奪者妨害民生主義社會的安全。」

「我們更須注意的，農工與小資產階級三者爲國民革命的主幹部隊，誰都承認。但三者之中，也有擔同的利益，也有不同的利益。農工，第一，歷史上的各國國民革命是資產階級領導的，而中國國民革命的領導者爲農工階級。第二，歷史上的各國國民革命最終點是趨向資本主義，而中國國民革命的最終點是民生主義——社會性的主義。

從上面兩個例外觀察，我所以喚中國國民革命是變態的國民革命，是社會主義性的國民革命。簡單一句詩，就是要在國民革命中完成社會革命，以黨的力量——以黨以國——消滅資本主義，而建設一個民生主義的國家」（前揭書　二—三頁）。

そこで、彼等は、小資產階級の效用を充分にみとめ、その社會的使命に基いて、あくまでもこれを擁護する。しかしながら、彼等がやがて成長して、民生主義的國家への轉生を阻止するに至るやうになる虞れがある。このことは、極力警戒し、對策を講じなければならぬ。

「我們既要小資產階級作革命及建設國家資本一條臺柱，我們一方面既須扶助其發展，一既爲較貧苦的階級，在革命期中當然有本身的要求。中國既沒有大資產階級作他們攻擊的目標，當然移轉其攻擊焦點於小資產階級。這麼一來，不是農工脫離革命的陣線，就是小資產階級脫離革命的陣線，之者無論任何方面拋棄資命，對於整個革命前途皆有破壞之可能。我們應該怎樣聯結他們的陣線，應該怎樣使他們就其本身立場取得相當的利益，應該怎樣使農工不致落後于小資產階級，使之者不致互相衝突，完全在於我們指導之得當與不。這種責任就是我們黨員的責任，就是眞正革命者出發的立足點了。」（同書　一一七—一一九）

彼等の目標は、軍閥と歐米列强の挑梁の下から、國民皆貧の狀態を救濟し、全國民の利害を調和せしめることであつた。それは各社會構成層の職分の重要性を强調して、その階級性を否定する。かくて、大資產階級の出現を拒否——無產者獨裁の狀態を排擊するが、資本の意義と、農工の重要性を確認する。それは、實に中產階級を中心とした職能社會の建設である。こゝに彼等の民生主義社會がある。

聖賢派が、彼等の理想社會を過去に求むるロマンティカアであるとするなれば、改組派は未來への夢想にそれをもとむる理想家である。

中央派が、獨裁主義と全體主義の間を去來するものであるとするなれば、改組派は全體主義と無政府主義の間を去來するものといふべきであらう。

八

近代プロレタリアートと聯繫し、その尖銳なる理論と戰術と實行力を利用することなくしては、半植民地的地位より支那を解放し、三民主義に基く民生國家を建設することは不可能であると考へて、敢然、國民黨の門戸を開いて、擴大したものが改組派である。而して彼等とその方策を等しくし、その目標を異にするものは第三黨乃至機會主義派である。彼等は、支那社會の特殊事情の確認から出發して、啓蒙されざる支那プロレタリアートとしては、

社會主義革命の實現するに先立ち、一應は國民革命を援助し參加して、これを成功せしめなければならないと考へた。

彼等は、國民革命を「內に對する民主革命と外に對する民族革命の兩意義」をふくむものと定義する。即ち半植民地支那においては、その經濟權の大半は、歐米列强の掌中に操られ、政治權の大半は形式上自國の軍閥の手に收められてゐるのであるから、支那の資產階級は、無產階級とともに、同じやうな立場に置かれてゐる。こゝに、兩者は相携へて立ち上り、經濟的自由と、政治的平等のために國民革命を斷行せねば成らぬ。

しかも、かゝる革命の主幹をなすものは、勿論資產階級であらうが、（改組派にあつては農工階級であつた）しかし資產家階級のみをもつて、かゝる事業を完成することは不可能だ。いわんや農工階級のみの革命は、到底望み得ない。これこそ國民革命の特質である。

「斯くて、我々は知る。支那の最大多數の勞働者は、未だ自己階級の政治鬪爭の要求と可能性とを有せず、且つ一般的政治鬪爭の要求から自身の階級の經濟鬪爭の要求までをも有してゐない勞働者（手工業勞働者）も又少數ではない。我々は又知るべきである。產業未發達の支那に於いて、勞働者階級の單純な經濟鬪爭は重大な意義を持たない。大部分の產業管理權は、外人の手になければ軍閥政府の手にあるのであり、勞働者の經濟鬪爭の對象は、帝國主義的外國でなければ軍閥であり、故に經濟鬪爭が稍々劇烈になると、そこに政治鬪爭となる。我々は更に知らねばならぬ。かゝる植民地半植民地の政治鬪爭は、單なる一般的な政治鬪爭が、即ち全國の各階級が共同して政治上の自由を要求する鬪爭であり、勞働達自身の階級の政治鬪爭ではない。何故なら政權を掌握する者は直接には軍閥であり、間接には帝國主義的外國であつて、本國の資產階級ではない。故に支那の勞働者階級は、現下の環境の必要上、又現下の自身の力の可能性に於いて、各階級共同の國民革命に參加すべきである」（陳獨秀　支那國民革命と社會各階級）

萬一、勞働階級が、かゝる聯合戰線に參加しないとするなれば、その結果は、次の如くおそるべきものがあるのである。

「一、勞働者階級はこの革命が成功する時に地位を失ふ。二、勞働者階級は、この革命の鬪爭過程において、自己の階級の戰鬪力を發展せしむる機會を失ふ。三、實際運動に參加しないならば、勞働者階級がいかなる急進的主張を有するとも、それは單なる主張に過ぎず、事實は立停つて一歩も動くことが無い。四、自己階級の政治鬪爭が目前既に不可能であり、それで聯合戰線に參加しないならば、結果は必ずや政治鬪爭の戰線を離脫し、經濟鬪爭の空看板の下に眠り込むに至るであらう。かゝる政治を離脫した經濟鬪爭は、必然的に支離滅裂となり、地方的、改良的となり。勞働者階級を萎靡させるのであつて、根本的に、統一的に、革命的に勞働者階級を强固にするものではない。」（同書　一七―一八頁）

かゝる聯繫妥協は、決して彼等の自覺意識を弱めることなく、來る可き鬪爭の温床となるであらう。

「勞働者階級の階級的覺醒は產業の發達、階級の分化に伴つて發生し强烈化するものであつて、人力による提唱で

生れるものでもなく、人力による否認で紊亂せしめ消滅せしめ得るものでもない。勞働者階級の戰鬪力は、門を開いて出で立ち、複雜な鬪爭に參加してこそ養成されるもので、決して門を閉ぢて寡婦處女の間違ひ防ぎの政策をもつて、危險を免れ得るものではない。勞働者階級はたゞ獨立的組織を有ち、一時期の政治鬪爭の聯合運動と經濟鬪爭の主義妥協とが同じものでないことを知れば、勇敢にかゝる複雜した鬪爭の國民革命に參加する、そしてそれは勞働者階級には利益こそあれ決して危險はない。之に反して、門を閉ぢて目前に必要な、そして可能な政治鬪爭の聯合戰線に參加しないことには、上述したところの危險が存するのだ！」（同書）

こゝに、資產階級及び資本主義制度の修正は一時延期せられる。その尖鋒は唯、軍閥へ、そして歐米列强へと向けられる。

「半植民地に陷り、そして完全な植民地に陷らうとする悲運にある支那人は、先づ列强及び軍閥の二重の屈辱より解放されないならば、他を云ふことは出來ぬ！」（同書　二一頁）

これ等一切に反對し、小資產階級は到底最後まで國民革命を推行する意思も氣力もなく、これ等と聯繫することは、支那農工階級の能力を削減するものである――故に結局において支那資本主義體制の建設をめざして、社會主義國家の建設をかいりみぬ、これら一切とは切り離れて無產者獨裁を叫ぶものが、第三インターナショナルの指導下にある中國共產黨であることはいふまでもない。われわれは、これをも、三民主義者の中に含めることは至當でないと考へる。

九

一九二七年、南京武漢の對立と、蔣介石派の行つたクーデタェーとは、三民主義にふくまれてゐた諸々の對立と矛盾とを白日の下にさらけ出してしまつた。

國民黨內の諸會派は、それぞれ自己の姿にうつし變へた三民主義を、孫中山の指導精神としてふりかざす。こゝに、混濁せる理論鬪爭と反蔣戰をめぐる武力鬪爭が展開された。

三民主義は、かくのごとくにして、崩え去らんとしたのである。

それは、信念として、――いひ換へれば、歐米列强の政治經濟的壓迫を拂ひのけ、軍閥の挑梁を排擊しやうとする國民革命の破壞的方面においては、少くとも、辛じて、ある共通點を見出して、互に聯繫した。

しかしながら、支那をいかに建て直す可きかといふ建設的方面においては、決して一致することが出來なかつた。彼等は、それぞれ異つた「設計圖」をもつてゐた。

こゝにおいて、孫中山の卓越、威大なる足跡と、生ける信念としての三民主義のみを殘して、形骸としての三民主義たる國民黨は、時が立つに從つて、一黨去り、一派袂を分つて、次第にその本義を失つてゆく。それは、むしろ必然であり、また宿命である。

三民主義は、來るべき東亞建設のための理論の一翼として、その使命を果すためには、當然、更生し、解脫しなければならぬ筈である。

しかるに、今次事變は、一九二七年以後、互に仇敵と見做し、ともに天を戴かずと叫んだ諸會黨を、再び「抗日」といふ目標によつて結び付けたのである。そこには、何等統一したイデオロギーといふものがない。もしありとすれば、それは單に、「抗日」の傘下への無條件なる參加であつて、何等心からなる融合ではない。これもまた、くりかへされた「同床異夢」にすぎぬことは、既に明かである。國共合作は、安南ルート、ビルマ・ルート、新疆ルートの三脚の上に、辛じて國民黨の對面を維持してはいるものゝ、それは各派によつて、互に、「ヒサシを貸して、母屋をねらふ」策略上における均衡にすぎぬ。

眞に、支那を立て直し、眞に支那を更生せしむるがためには、統一した指導原理を持たない。單なる集合であつてはならぬ。即ち、古きまゝの三民主義をもつてしては、到底、その目的は達成することは出來ない。それは、やがて修正され、更生されて、新たにくりひろげられてゆく東亞の新事態に則應し、また支那民族自體の特殊性を考慮して、東亞永遠の平和の基底となる可き、ものゝ上に打ち建てられねばならないであらう。

附記　本論を草するに當り、學友小林宗三郎君の助力に俟つものが、甚大であつた。記して感謝の意を表したい、

一九三九、九、二〇

短期經營成果計算形式について

小高泰雄

一、短期成果計算と經營機能の經濟性確定
二、個別給付の成果計算
三、短期成果計算の勘定統制
一、金融會計との關聯に於ける短期成果計算
二、經營會計に於ける短期成果計算

一

經營經濟に於ける三個の評價段階たる原價要素價値の決定、給付への價値の綜合、給付の經濟性決定に照應して、原價要素の計算、綜合計算、經營成果計算の行はるゝことは既に本誌所載の「經營評價と經營計算」に於いて明かにしたところである。經營成果計算は經營給付の經濟性を確定することを主眼とするものであるが、凡そ、經營活動に對しては、其の提供する給付の經濟性如何が決定的重要性を有するが故に經營成果計算は經營計算制度に於いて最も重要なる計算部門を構成するのである。然しながら前述三個の計算部門は密接に關聯してゐるが故に、經營成